

「諸天は神の尽きぬ榮  
世人に語り…」

感謝祭という行事は、新使徒教会においては、長い伝統があるが、日本においても、美しく飾られた祭壇は、会衆にふさわしい、文化の表現である。感謝祭は表現の一形態であるが、大地の産物である果実や野菜などが、今でも感謝祭の祭壇を飾る基本的な産物である。結局、感謝祭の元来の意味は、収穫に関することであり、このようにして、私たちの日毎の糧に関連してことである。

大抵の場合、会衆の会員達が土曜日の夕方に献品を持参して、感謝祭のために、準備し、祭壇を飾る。感謝祭は会衆の生活で、極めて喜ばしいひと時である。

本年は感謝祭礼拝が10月2日に行われた。

松山教会の祭壇 (右)

多摩教会の祭壇 (下)



## 感謝 の 仕方

日本の会衆における説教は、人類の始まりから、創造と、終末とキリストの御来臨に至るまでの神の救いの御業について、私たちの感謝を表したものである。聖句はヨブ記28章24節で、「神は地の果てまで見渡し、天の下、すべてのものを見ておられる」。(ニューズレターNo. 10, 『平和と感謝』の記事を参照してください)。万物は神から出て、命は今もって全能者から生じ、神を経てゆく運命にあり、主の絶えざる救いの御業が遂には神に帰り完成を見、主と永遠の交わりに入るのです。

「全てのものは、神から出て、神によって保たれ、神に向かっているのです、栄光が神に永遠にありますように」(ローマ 1:1)。



